

間もなく、御代替りを迎える。

今上天皇がなぜ、生前退位したのか、について、おもしろい見解の本がでた。これまでも何度か、今上天皇の災害をめぐる態度について書いてきた。

今上天皇は単なる被災地への寄り添いに留まらず、日本国民に自然観を取り戻せと警鐘を鳴らしてきたのだというふうに書いてきた。

このことを改めて裏付ける見解を示す書籍が相次いで出版された。「平成史」(保阪正康著)と「災害と生きる日本人」(磯田道史、中西進著)だ。保阪氏は、「災害史観」という言葉で、災害が相次いだ平成の世を語る。そうした時代背景がもたらした、国民性を、社会の諸相において「コントロール不能な感情をもつにいたった」と断じる。こうした状況に対し、今上天皇は生前退位をもって、「国民に統合をよびかけた」と主張している。



時代の変り目に相次いで出版された警世の書

「災害と生きる日本人」で両者は、我が師寺田寅彦を取り上げ、寺田師が遺した「国防と防災」について論じる。天災にさいなまれてきた日本人の知恵を、今こそ、学ぶべきだ。いにしえの人々はそうしてきた。しかしながら近代にいたり、自然を征服したかのようなふるまいを続け、現代になってツケを払うというかっこうになっている、と論じる。

このふたつの著作に共通した思いは、「こうした社会状況に政治、リーダーたちが無頓着だ。そのことが国民性の荒廃をまねいている」ということだ。

いままで本欄が論じてきたことが、ようやく、表だって議論されてきたことで、確信を得たとの思いを強くしている。

両書をぜひ、手にとっていただきたく思う。

(平成 31 年 3 月)